

日常生活と歴史的社会的な世界, 人間 : 身体, 芸術, 風景・音の風景

著者	山岸 健
雑誌名	人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 : 大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	20
ページ	167-186
発行年	2018
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006706/

日常生活と歴史的社会的世界，人間 ——身体，芸術，風景・音の風景——

Everyday Life, Historical Social World, and Human Being ——Lived Body, Art, and Land/Sound-scape——

山岸 健*
Takeshi YAMAGISHI

<キーワード>

人間，身体，生，日常生活，時間，多元的現実，風景，音の風景，景観，心，
イマージュ，詩・詩歌，絵画，芸術，表現，色彩，光の声，リズム，
意味，方向，環境，世界，時代，世代，旅，トポス，ホドス

<要 約>

人は人びと，顔と顔，手と手，指と指，二人として同じ人はいない。人びと，それぞれの生活史は，さまざまな歴史や時代と密接につながり合っており，人びと独自の日常生活や人生は，歴史的社会的世界やさまざまな環境，環境世界，生活世界に深く根ざしている。——私は私と私の環境世界である，というオルテガ・イ・ガセーの言葉に人間の生存と生活の姿がはっきりと認められる。オルテガにおいての環境は，およそ風景であり，生とは風景との対話なのである。

ところで風景画をはじめとして，自画像，家庭画，静物画などまことに多様な絵画があり，洞窟の壁画から始まって，時代，時代の各地域の絵画や多様なジャンルの芸術作品と制作活動に注目するならば，人類と人間の多様な生活史や姿が浮かび上がってくる。

日常生活こそ社会学や人間学の基盤であり，さまざまな分野の芸術の土壌なのである。

芸術ほど人間の，人間の身体の，晴れやかな姿と生き方がユニークな姿で浮き彫りになる人間の営みはないだろう。芸術作品は，創造や制作の試み，営みは，人間の存在証明であり，こうした営みにおいてイメージされる人間のアイデンティティや人間の声，さまざまな声や音に注目したい。

* 大妻女子大学 名誉教授

絵画、彫刻、建築、音楽……などは相互に密接に結びついており、文学のさまざまなジャンル、例えば詩歌 poetry や詩 poem の根底である人間の心、心情は、芸術の諸領域と通底し合っている。

詩と絵画とは相互に支え合う状態にあり、詩はなかば絵画なのだ。古代ギリシアのプルタルコス¹は、詩を言葉で描く絵画、絵画を言葉を用いない詩と呼んでいる。

どのような姿形の絵であろうと、その技法や素材、線、色彩、タッチ、マチエール（絵の肌）がどのような状態の作品であろうと、芸術作品と芸術活動はなかば詩であり、文学の諸領域や芸術は生活の展開なのである。

人さし指は、無から存在への道しるべである、というフォイエルバッハの言葉は、人間学へのスタートラインとなっているメッセージだ。

ローマのシステリーナ礼拝堂の天井壁画、ミケランジェロの絵画においては神の右手の人さし指とアダム（アダモ）の左手の人さし指とが、いま、まさに触れ合わんばかりの姿で描かれている。

人間とは全身である。身体と精神、心だ。身体によって人間は大地の友となっており、こうした身体によって日常的世界や人びとのなかに住みついている。自分自身の身体との対話が試みられていない人は、いないだろう。身体は人間の故郷であり、大切な支え、生死が委ねられているこのうえなく尊い座標原点、時間と空間の母胎なのである。

誰もが、私とは私の身体である、といわないわけにはいかない。生命体である身体は、心や記憶の根底的なトポスであり、ホドスなのである。トポス＝場所、家……／ホドス＝旅、方法、生き方……。

さまざまなリズムがあるが、身体は太陽とともに、そうしたリズムの基準となっている。すべては人間の身体や感覚からスタートして、すべては人びとそれぞれの身体へ戻ってくるように思われる。身体への回帰は、まことに人間的な営みなのである。

いま時代は、どのような方向に向かって、どのようなスピードで、どのように変わりつつあるのか。社会学的意識の働き方が、あらためて問われている。

いま人間の身体やアイデンティティ、人間性、人格、生き方、人生は、人と人とのつながりや人間関係、家族生活、生活設計は、どのような状態にあるのか、また、どのように変わりつつあるのか。

人びとの〈まなざし〉は、どこに、いったい何に向けられているのか、注がれているのか。大地や風景、地平線や水平線は、人びとの視野や生活の領域に入ってきているのか。

遠くを眺めること、さまざまな光や音との触れ合いは、生活のなかで大切な意義を担っているのか。

身体の充実と拡張は、日毎に私たちにとって大切な営みとなっているのではないだろうか。

感性和想像力を豊かに培いながら人間性を育み、個性的で社会的な人格をかたちづくっていくことが、人生の旅びとに求められているのである。

＜エピグラフ＞

僕は絵の中で音楽のように何か人を慰めるものを語りたい。僕は男や女で何か永遠なものを描きたい。永遠なあるもの——昔は後光がその象徴であったが、われわれは輝きそのものによって、われわれの色彩の振動によってこれを求めるのだ。(中略)

星によって希望を表現すること。夕陽の輝きによってある人間の烈しさを表現すること。

フィンセント・ファン・ゴッホ

私たちは不可視のものを集める蜜蜂です。私たちは、情熱をこめて、可視の sichtbar ものの蜜を集めているのですが、それを大きな黄金の巣に、不可視のものの蜜房に集めるためなのです。

ライナー・マリア・リルケ

現在においてさえ、風景は布置なのである。

もろもろの物は私の身体の延長であり、私の身体は世界の延長なのであって、私の身体によって世界が私をとりかこんでいるのである。

私の身体は極端な言い方をすれば、すべての物がそれであるもの、次元的なこのものなのである。

モーリス・メルロ＝ポンティ

ミラボー橋の下をセーヌ河が流れる
 日も暮れる 鐘も鳴れ
 月日は流れ わたしは残る

Le Pont Morabeau

てのひら
 掌を眺めよう
 掌は未来のように
 雪であり薔薇であり
 そしてまた蜜蜂だ

未来 L'avenir
 アポリネール

人生の音を正確に、正しいテンポで弾けば、人の一生は音楽になる。

ジョン・ラスキン

<出典>

ゴッホのアルルからの弟テオドルあての手紙—J.v. ゴッホ『ゴッホの手紙』
(中) ポンゲル編, 裕 伊之助訳, テオドル宛, 215 ページ, 217 ページ, 第 531 信,
みすず書房。

ヴィートルト・フォン・フーレヴィッチへ (消印, シエール) 1925 年 11 月
13 日—『リルケ美術書簡 1902—1925』塚越 敏編訳, 237 ページ, みすず書房。

M. メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』滝浦静雄・木田 元訳, 付・
研究ノート, 350 ページ, 374 ページ, 382 ページ, 研究ノート, みすず書房。

『アポリネール詩集』堀口大學訳, 62 ページ, ミラボー橋, 125 ページ, 未来,
新潮文庫。

『音楽という魔法 音を語ることばたち』ミッキー・ハート&フレドリック・
リーバーマン編集, 山田陽一・井本美穂共訳, 144 ページ, 音楽之友社。

今日は, 2018 年 9 月 28 日, 金曜日。——日, 月,
火, 水, 木, 金, 土, 曜日も日付も記憶の道しる
べやよりどころとなっており, 重要だ。

日が昇り, 日が沈む。昼と夜, 一日。そして翌日。
日々が過ぎていく。歳月, 年月。

春夏秋冬, 季節がゆるやかに過ぎて進む。時と
ともに変わりゆくものがなんと多いことだろう。
万物流転。時の経過とともに, なにかもが失わ
れてしまうのだろうか。そんなことはない。時熟
していくものがある。ふくらむ思いや思い出が
ある。充実していく人生がある。人生をどのように
イメージするか。きわめて大切なことだと思う。
人生と呼ばれる旅路をどのような生活態度で生き
生きと歩んでいくのか。どのような希望を抱きな
がら, どんなヴィジョンを描きながら生きていく
のか, 人生と呼ばれる画面, キャンバスにどのよ
うな絵を描いていくのか。気になることではない
だろうか。

今日, 9 月 28 日, 午前 6 時半ころの太陽の位置
と姿, そして午後 3 時すぎの太陽, 旅びと太陽と
呼びたくなる。夕方の光の輝きがある。大空, 今
日の秋空は澄みきっており, 美しい。大空は太陽
の広場であり, おおいなる道である。雲が浮かん
でいる。雲は太陽の友だが, 雲といってもまこと
にさまざまだ。夏の入道雲があり, 秋空を飾って
いる雲の姿, 形や表情, 動きがある。

詩人, 小説家, ヘルマン・ヘッセにとって子ど
も時代, 雲は大切な遊び仲間だった。雲と戯れる
ことは, ヘッセにとって大きな楽しみだった。

ヘッセには〈記憶の絵本〉という言葉がある。
そうした絵本の一ページ。——太陽が西に傾きか
けている時だったが, 両親がそうした太陽に向
かって仲むつまじく歩いていく。太陽は, ヘッセ
の前に行く両親のあいだにゆっくりと落ちてい
く。幼いヘッセは, 両親のあとを追うように歩い
て西へ向かっている。目に浮かぶ絵のようなシー
ンだ。

ヘッセには人間的体験, 精神的体験, 風景体験
という表現, 言葉が見られるが, 注目したいとこ
ろだ。ここでヘッセをあえて風景の人と呼ぶこと
もできるだろう。

風景 *paysage* は, 大地の姿, 顔, 表情であり,
visage 顔という言葉とつながり合っている。大地
の地形や顔の姿, 地形もある。顔面や身体ほど魅
力的な眺めがあるだろうか。沈黙の壁, 口が開い
て, 音声や言葉が生まれる。大切な瞬間だ。

シェイクスピアには, 「言葉, 言葉, 言葉」と
いう^{せりふ}台詞がある。また, つぎのような台詞もシェ
イクスピアだ。——to do, to act, to perform.

演劇, 芝居, ドラマは, 人間の行為の展開とそ
うした行為の姿, 様相などによってかたちづくら
れている。まさに人間劇だが, 日常生活と人生。

人と人とのつながりと人間関係。さまざまな出来事と結末。さまざまな愛や憎しみなどが、演技と演出、舞台装置、シーンなどによってくりひろげられている芸術である。芝居、ドラマの登場人物をつぎのように呼ぶ。—— *dramatis personae* 仮面 *persona*、そして素顔、さまざまな面や面の表情がある。面の文化や面の芸術がある。

イタリアを旅していたゲーテは、ヴェネツィアで夜、仮面舞台劇を観ている。昼間、町なかで目にした光景が、舞台上で演じられているのだった。ゲーテは、ヴェネツィアで孤独な自分を体験している。北方、霧の国からやってきたゲーテは、アルプスの南のイタリアで生活習慣や時間感覚の相違を体験している。ゲーテは、ローマをめざす。ゲーテの作品『イタリア紀行』には、〈われもまたアルカディアに〉という副題がつけられている。アルカディア——理想郷だ。ギリシアのペロポネソス半島の山中にこのアルカディアがあるといわれてきた。ユートピアは、どこを探しても見当たらないところを意味する。実在しないところだ。ユートピア思想がある。

仮面のデカルト——これまで私は舞台を眺めている観客だったが、これからは仮面をかぶって進み出る、というデカルトの言葉がある。

いずれにしても、顔と仮面、仮面の文化、人間の行動と行為、演技、舞台、人と人とのつながりと人間関係は、素顔や表情、言葉、言語、音声、服装、身ぶり、手ぶり、歩き方などとともに、いつも気になることだ。

初めに行為があったのか。ゲーテの『ファウスト』の一シーン。ファウスト博士は、初めに言葉があったのか、どうか思い悩む。初めに意味があったのか。初めに力があったのか。悩んだ末について答えを見出す。——初めに行為があった。

言葉も、意味も、力も、行為も、ことごとく人びとの日常生活と人生、生活史において重要であり、生きることは、こうした言葉や意味や力、そして行為と一体となっている。人間は意味の探究者であり、行為者だ。さまざまな力によって支えられている。人びとは言葉とともに、言葉のなか

で、言葉を発しながら共同生活を営み、互いに支え合いながらコミュニケーション・ライフを営んでいるのである。人間形成と人格の陶冶は、たえまなしに営まれている。その時、その時は、大切だ。

旅びと、太陽のリズムがある。太陽とともにイメージされる方向性がある。東方と西方。

さまざまなリズムに注目したい。呼吸のリズム、歩行のリズム、仕事の手順のリズム、音や音楽において体験されるリズム。そして日常生活のリズム。筆づかいのリズム。リズム、リズムだ。

メキシコの詩人、オクタビオ・パスは、リズムは、意味であり、方向だ、という。

リズム、意味、方向に見られる一貫性に注目することによって、人間の生活や行動、行為、自然のさまざまな営みなどが明らかとなるのではないだろうか。東西南北の方位や方向性は、決定的に重要だ。地図では北がはっきりと示されている。磁石がある。さまざまな道しるべがある。この道は、どこに向かっているのか。

方向と方向性といえば、川や河川が注目される。湖水や沼や池とは異なり、河川という陸水は、矢印そのものだ。

フランス語 *sens*。この言葉には感覚・意味という意味と方向という意味があり、意味づけるということは、方向づけるということだ。河川の流水と運河の水面とは、その様相がまったく異なっている。方向や方向性が不明の時、とまどいや不安を感じない人はいないだろう。流れのリズムやリズム感もある。リズムが乱れた時、リズムが不明の場合、コスモスからカオスへの転落が始まる。カオス、混沌とした状態は、覗きこんでも何がどうなっているのか不明の黒々とした穴を意味する。コスモスとは、明るい光が感じられる、バランスがとれた、秩序づけられた状態をさす。だが、光といっても適度の光が求められる。光と闇、明暗、光線——形や色彩、コンポジションなどとともに絵画が姿を現す。

会話のリズムがある。言語や言葉は、さまざまなリズムと一体となっている。特に詩歌 *poetry* は、さまざまなリズムによって、その姿、形が整えら

れている。五・七・五・七・七のリズムや五・七・五のリズムなどがあるが、詩のスタイルや形式は、まことに多様だ。人間の声が、こうしたスタイルを独自のものとしているのだろうか。言語や言葉と音声の一体感に注目したい。声一聲。言語や言葉の母体となっているように思われるが、文字の姿・形に注目したい。さまざまな文字や字体に風景がその姿を現している。——木、林、森、一例だ。

ところで人間。人は人びとであり、人と人、人と人とのつながりと関係、絆、縁、さまざまなメンバーシップなどに注目したい。

モンテニユは、人間を理性的動物、命に限りがある存在などと呼ぶよりは、ただ人間という呼び方が人間にはふさわしい、という。

精神と身体という言葉があるが、なによりも初めに身体だ、ということもできるだろう。

モーリス・メルロ＝ポンティは、身体を世界への投錨と呼んでいる。投錨——船がイメージされる。確かに人間の身体と船には共通するところがあると思う。

身体は座標原点、さまざまな方向が凝縮されている身体は、行動や行為においても、感性や想像力や夢においても、中心となっているところだ。

身体は決定的なトポスであり、ホドスなのである。

トポス τόπος というギリシア語には場所、位置、ところ、部屋、座席、村や町や都市、チャンス、職業、墓、墓地などという意味があり、ホドス ὁδός という言葉には、方法、道、旅、旅路、行為、生き方などという意味がある。こうして見ると、人間の身体は、明らかにみごとにまでトポスであり、ホドスでもあるといっても過言ではないだろう。人間は、その受胎、生育、誕生において、その行為や行動、能力などにおいて、その生存と生活、人生において、ヴィジョンや想像力などにおいて、感性において、制作や創作の活動において、身体と呼ばれるトポスとホドスによって支えられてきたのである。

人間、誰もが日々、いつもさまざまな方法や仕方によって身体をコントロールしながら生活している。身体、まさに生命体は、人間にとって常住のよりどころ、座標原点、決定的な大地であり、プラクシス、行為、実践とポイエシス、制作、創造の中心軸、動力、晴れの舞台なのである。

身体が自由が利く、動きまわることができる、見ることも、話すことも、聴くこともできる……さまざまな能力のつぼ、身体は、人間にとって明らかに命綱であり、まことに尊い命、かけがえない生命体なのである。

歩行することができる、食事することもできる、話すことができる、運動する、眠りにつくことができる、意欲がわく、ヴィジョンをいだく、希望する、他者のために行動する、行為する、祈りを捧げる……こうしたことが可能であるということとは、ほんとうに幸いなことだと思う。

助けや支えがなければ、どんな人でも安定した状態で日常生活を営むことはできない。身体に故障、トラブルや障害がある場合には、どうしても特別なサポートが必要となってしまう。人間の身体は、いつもまことに微妙な状態にあり、誰もが多かれ少なかれ相互的なサポートを必要としているといってもよいだろう。

リハビリテーションが必要となる事態、状況がある。そうした時、あらためて自分の身体を見つめ直す。いつものことがうまくいかない。いろいろなトレーニングが必要とされる。自分の身体であつても一筋縄ではうまくいかないことがある。身体は人間にとって、なかなか厄介な、手ごわい対象だといわざるを得ないだろう。ほんの少しのことで、あらためて自分の身体を直視せざるを得ない場合がある。身体となんとかして、うまく折り合いをつけて生活する。誰もが、意識する、しないにかかわらずに日々、心がけていることではないだろうか。

身体において、なによりも人は、自分自身なのだ。I, me, self という言葉があるが、まず初めに注目されるのは身体だ。さまざまな身体儀礼がある。

人と人との出会いや交わり、相互行為、さまざまなパフォーマンス、身ぶり、手ぶり、姿勢、態度などにおいて、身体のコントロールが、おおいに注目される。礼儀作法、マナーにおいての身体の姿がある。

いったい、いつ、誰が人間の身体を発見したのか。どのような時に人びとの目に身体がはっきりと映るようになったのか。古代ギリシア世界が姿を現す。

前と後、左右、上下——身体は、こうした方向や方向性の座標軸であり、中心点、中心軸、原点だ。向き、方向の指標、それが身体だということもできるだろう。身体には、いつも他なるところや他なるもの、さまざまな対象や物体、他者、風景などが浮かび漂っているということができるだろう。

身体、着衣、服装、アクセサリ、持物……身体を包み隠す、印象操作のさまざまな方法がある。化粧する生活もある。顔は人格の座だが、身体全体が人格のトポスなのである。

ところでパリのルーヴル美術館にはギリシア彫刻の名高い作品、優美の極みと呼びたくなる作品が、中央の正面階段の局所に飾られている。階段を上っていく人びとに驚きを与えるような例を見ない彫刻作品だ。

「サモトラケのニケ」想像力がかきたてられるようなポーズであり、翼と人体がひとつに結ばれている。船が姿を現している。船の先端部分にすくとその姿を見せているこのニケは、風を受けており、雄々しくも、たくましい。雄姿だ。そしてバランスがとれており、優美な姿だ。視点や角度、距離のとり方などによってイメージや印象が変わるが、多様なアプローチと距離と角度によって、この彫刻作品の核心に触れることができる。

この作品は、まるでルーヴルの守り神のようにも感じられる作品だ。人びとの、人間のさまざまな思いが深くこもっている。モニュメンタルな彫刻作品だ。重量と軽快さとがみごとに結ばれて、空間がダイナミックに意味づけられている。ギリ

シアだ。

パリでルーヴルを訪れた時、何度もこの「サモトラケのニケ」をスケッチしている。絵どころがそそられるモチーフ、作品だ。風の絵、海の絵、航海の絵、身体、人体、リアリティと想像力の融合……この作品をスケッチブックに描くことによって生まれる絵画や世界がある。

絵画は平面の戯れにすぎないのではない。コンポジションとパースペクティブによって生まれる立体感やヴォリューム感などがある。絵画はなによりも光であり、光と影や陰影、点や線や面、コンポジション、タッチ、筆触、マチエール、絵の肌合い、色彩などによって独自の絵画世界が生まれている。ゲーテやセザンヌが着目していたように絵画において光学をイメージすることができるだろう。適度の光によって絵画は救われてきたのである。

彫刻においても光や影は、さまざまな明暗は、きわめて重要だ。平面から立体へ。浮彫の手法、方法がある。壁面が彫刻の土壌となっているといっても過言ではない。

さまざまな壁は、彫刻や絵画において、いうまでもなく建築においてきわめて大切なシュポールだったといえるだろう。フランス語シュポールには支え、台、支持体などという意味がある。建築では空間や空間の形成が問われるところであり、ポール・ヴァレリーは、建築を空間に捧げられた頌歌と呼んでいる。

リズムは、世界の鼓動であり、万物がそれによって統一されていて、秩序づけられているところのひとつの中心的な原理ではないだろうか。身近なところでは、呼吸や歩行。

医療や看護、介護、さまざまな援護の現場においては、人と人とのつながりや関係、サポート、助けがたえまなしに必要とされており、身をもってそうしたサポートや看護、介護を体験したことがある。歩く、歩行においてもトレーニング、リハビリテーションが必要とされる。リハビリテーションの順序、段階、方法、形態があり、ステップをふんで歩行のトレーニングがおこなわれる。

歩くということは、トレーニングを積んで可能となる。人間の身体や運動にはさまざまな形式や形態が課せられている。身体儀礼という言葉もある。フロントに姿を見せながらバック、裏舞台において行動している時とでは、行動や演技、表情、服装、身のこなし方にさまざまな相違が見られる。

演技や行動、行為、言葉のはこび方、表情などにきびしい形式が課せられているのは、演劇の舞台だが、日常生活の社会的世界やさまざまな職業などにおいても、行動や行為のパターンやスタイルには心くばりが必要とされる。常識の世界がある。

カフェ（カフェ）のボーイの行動のパターンについては、ジャン＝ポール・サルトルの言説がある。自己欺瞞の行為というキーワードがある。

絵画史を見ると日常生活のさまざまなシーンや人と人との多様な交わりなどが描かれた作品があることに気づく。17世紀のオランダの家庭画と呼ばれてきたジャンル、領域に注目したい。

人と人が出会った時、人と人が触れ合ったり、隣り合った時、人びとがあるところに集まった時、どんなことが起こるのか、こうしたことが社会学の根本的な問いかけだ。アリストテレスが注記して注目したホメロスの言葉——「部族もなく、法もなく、妬もなき者」という言葉に注目したい。人は一人では生きることが困難だ。人びとのなかで、人びととともに生活してこそ、自分自身を支えることができる。人間には言葉をかけることができる対象が必要だ。

南フランス、エクス＝アン＝プロヴァンスのモーヴの家、アトリエで絵画の制作に従事していたポール・セザンヌは、夕刻、庭に出て、庭の片隅のオリーブに近づき、心の友となっていたオリーブに触れながら、オリーブに声をかけることを常としていた。友人ガスケが記しているシーンだ。

セザンヌは、ガスケの家を訪れた時、ガスケのかたわらにあったシャルル・モーラスの小冊子の扉を飾っていたオーギュスト・コントのつぎのような言葉を目にして自分が進むべき道と方向を見

出す。コントの言葉——「服従はあらゆる進歩の基本である」。対象に忠実に従って、自分の能力や力を開花させることができることに気づいたセザンヌは、大地を見つめ、身の辺の対象を表現することを決意したのである。コントの短い言葉によってセザンヌは後押しされて、近代絵画の父と呼ばれる画家となった。

芸術家の全意志は沈黙であらねばならない。沈黙にひたって、完全なるひとつのこだまになる、というセザンヌの言葉がある。

これまでセザンヌのさまざまな絵画作品を鑑賞・体験してきたが、そのモチーフや主題、コンポジション、色彩、タッチ、マチエール（絵の肌合い）、光、明暗などにおいて、こだまとなったセザンヌと対面してきた。その筆づかい、タッチ、色彩、広く知られていることだが、セザンヌの余白、セザンヌの表現によってセザンヌの声が体験されたのである。

画面に見られる余白によって生まれた詩情がある。余裕の絵画と呼びたくなる絵がある。余白は、人びとを深い思いに誘い込む。

人類の記憶の総覧、セザンヌは、絵画についてこうした思いを抱いていた。なによりも表現、セザンヌの立場である。バルザックの小説『知られざる傑作』——老画伯フレンホーフェルが若きブッサンに向かって投げかけた言葉、「絵画は模倣ではなく、表現だ」というこの一言によってセザンヌは、目覚めたのである。

表現的世界は、おのずから自己呈示の舞台である。私はここにいるのだ、というメッセージ、それが作品だ。

ルーヴル美術館にはフランス絵画の展示室があり、ブッサンの絵画作品やクロード・ロランの絵画作品が展示されているすばらしい空間、トポスがある。ルーヴルを訪れるたびに特にこうした作品を時間をかけて鑑賞してきた。スケッチブックにクロード・ロランの海港の絵を描いたこともある。光の画家クロード・ロラン、太陽の画家と呼ばれることもあるこの画家がパレットを手にして立像が、パリ・セーヌ左岸のロダン美術館の庭園に姿を見せている。

ロダンの彫刻作品「カレーの市民」「考える人」「バルザック」などが、ロダン美術館の前庭に飾られている。

ドイツの詩人・小説家ライナー・マリア・リルケは、ロダンを敬愛してバリーに姿を現す。ピロン館と呼ばれていた今日のロダン美術館、ロダンの館にロダンを訪れて、ロダンのもとに身を寄せていた時期がある。

ロダン美術館の一角にロダンの作品「ラ・カテドラル」(1908年)が展示されている。男、女それぞれの右手が、触れ合わんばかりに立ち昇る手という姿で制作された、まことに印象的な彫刻作品だ。

身体、人間にとってなによりも頼りになる存在、だが人間にとっていつも気になっている、不安の種ともなっている身体、いつも私のここ、となっている定点、身体、私はなによりもまず私の身体なのだ。

他者のまなざしによって私の身体は包みこまれてしまっているものの、私にとっては自分の身体は、身近なところにありながら遠い、はがゆい存在、そして私のここ、それが私の身体。距離をとることが困難な状態にある私の身体。

オーギュスト・コントの見ている眼を見ることはできない、という言葉に注目していたジャン＝ポール・サルトルは、こうしたコントのアプローチに注目しながら、考察を進めている。

絵画史を見ると、画家が描いた数々の自画像が姿を見せる。自画像は、鏡像だ。人間にとって鏡は必要不可欠なものだが、さまざまな対象のなかでも鏡はまことに微妙な不思議な対象であり、人びとをさまざまな思いに誘いこむ。

鏡像は、イマージュ image、それはそのまま画像であり、図像、映像、さまざまな姿だ。鏡は反転そのもの。

ルネサンスを代表する人物の一人、レオナルド・ダ・ヴィンチは、裏返しの鏡文字を描いた人物だっ

たが、レオナルドは壁に映った人の影の輪郭線が絵画の始まりという見方を示している。

自画像の画家の代表は、いうまでもなく 17 世紀オランダのレンブラントだろう。いま手もとにつぎのような英語版のガイドブックがあり、旅の記念品となっている。——REMBRANDT-HUIS AMSTERDAM

自画像をたどりながらレンブラント論を展開することもできるが、レンブラントが描いた風景画もあるし、数々のエッチングにおいてレンブラントへのアプローチを試みることもできる。

特別に注目されるのは、レンブラントの絵画において体験される光だ。ジンメルは、こうした光を外光ではなく、内から発するところのレンブラント独自の光としてイメージしている。

レンブラントにおいてさらに注目されるのは、流れゆく生そのものであり、レンブラントにおいては生の哲学が色濃くイメージされるのである。

身体は生命体、終始、生がイメージされはするものの、生には最初から死が内在しており、生／死において身体の深遠な姿が浮かび上がってくる。重要なところだ。人生のきわめて深いところだ。それだけに生きるということには、特別な意義が認められるというべきだろう。

身体は人間の生存の輝かしい支えなのだ。なにもかもが身体においてイメージされるといってもよいだろう。

ポール・ヴァレリーは、さまざまな哲学的言説が見られたものの、正面から身体へのアプローチを試みた前例は見られないことに疑問を呈して、身体主義という立場と方法を明示した人である。

いったい誰が身体を見出したのか。哲学ではなく、絵画や彫刻の歴史的なシーンが浮かび上がってくる。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、男性の身体を示しながらヴィトリヴィウスの建築書にならって人体比例図を描いている。幾何学的な図形と身体がひとつになっているような絵画だ。レオナルドの「最後の晩餐」において、人間の身体が生き生きとクローズアップされてきていることにも注目し

たい。この名高い絵画においては、ジンメルの言葉を紹介するならば、容器となっている時間ではなく生そのものというべき時間、人間の時間が鮮やかに表現されているのである。

生、それは休みなく流れゆく河川の流れそのもの。海は生の象徴だが、ジンメルは、アルプスの万年雪は死の象徴だ、という。

社会学は、オーギュスト・コントにおいて実証哲学としてスタートしたが、生の哲学にも注目しながら社会学の方法と立場、アプローチやパースペクティブをイメージすることも必要だと思う。

文人・詩人、堀口大學にとつての鏡、私は鏡に映っている私を見るのではない、鏡に映っている私が、私を見るのだ、鏡の裏側を見るように、という堀口大學の言葉がある。

詩とは、イマージュであり、イリュージョンだ。タベの虹でありたい、というこの詩人の言葉がある。

身体は体験の本舞台、そして身体は方向と方位の座標原点。

身体・手・指——このように書いたところから始まるドラマやプラクシス、行為やポイエシス、創造がある。身体の一部や局部においてクローズアップされてくるさまざまなエピソードやイメージがある。耳に触れるさまざまな音や音の風景 *soundscape* がある。

身体とともに姿を現す、さまざまな楽器がある。楽器は手先で扱うような道具ではない。それは人間の身体、全身と人間の生がそれに委ねられるところのトポスであり、ホドスなのである。人間の生活と生存の根底や深部に楽器がその姿を現す。音楽はもうひとつの惑星であり、限りなくゆたかな大地そのものだ。

楽器が描かれた絵画がある。楽器や音具においてイメージされる人間の生活と生存の深さがある。

個人は社会である、という表現に人間の生活と生存の状況が集約されているといってもよいだろう。

う。人びとのなかで、人びととともに——こうした状況こそさまざまな事実、現実の根源的な現実であり、多元的現実の中心となっている現実だといえるだろう。

個人、個人の生活史は、社会的な広がりを見ているのであり、家族史、時代史、歴史、環境史など、さまざまな歴史の影が個人の生活史にさまざまな影を投げかけている。

歴史、それは毎日のことです。歴史は出来事ではない。それはまさに日常生活であり、社会学そのもの、といった哲学者ホワイットヘッドは、プラトンに社会学のスタートをイメージしているが、日常生活こそ、そして日常的世界こそ、社会学や人間学の本舞台ではないだろうか。おのずから人生がクローズアップされてくる。

フランス哲学について考察したおりに西田幾多郎は、フランスの知性と呼ばれる人びとのアプローチと方法について言及し、フランス語 *sans* の独特のニュアンス、語感に注目している。この *sans* にはドイツ語 *Sinn* や英語 *sense* とは異なる独特のニュアンスが見出されるのであり、いわばフランスの精神とでも呼ぶことができるある独自の意味内容が *sans* には浮かび漂っているのである。西田は日常的世界に着目して、日常的世界こそ哲学のアルファ α オメガ ω だということ。ここで日常的世界は、社会学の α 、 ω だといっても過言ではないだろう。

歴史の基体、それは時代だ、という西田の見解がある。私たちの誰もが時代を生きつづけてきたのであり、さまざまにイメージされる時代に思いをはせることは、自分自身を見つめることに通じている。自画像には時代の影が時には色濃く落ちている。

昭和の一桁、最後の年に生まれた私たちは、戦争と平和の時代を生き抜いた世代であり、学校の制度の改革を身をもって体験した世代だ。昭和20年8月15日は、記憶に鮮明な大切な日だ。私の生まれ故郷・新潟県長岡市は、昭和20年8月1日、夜半、空襲のために市街地の中心部は焦土と化してしまった。言葉にならないくらい悲しい体験だ。

長岡の年中行事、8月2日・3日の両夜、信濃川とその河原、土手が舞台、会場として平和と復興を祈願して大花火大会が開催されてきている。山古志地区の地震災害の復興の祈りもこめられている催しだ。全国的に名高い花火大会、花火は夜空を彩るみごとな花だが、花火は光彩やその姿、形、色彩、模様、光と闇にあるだけではなく、音や音響にもあるということができるだろう。最後の一言こそ花火の真骨頂だといっても過言ではない。

信濃川に架かる長生橋を舞台としてナイアガラの滝がみごとな光景としてその姿を見せており、スターマインなどとともに花火の宴が人びとを魅了している。信濃川は長岡の母なる川であり、市域の東方の東山、西方の西山、そして南方から北方に流れ下っている信濃川によって新潟県中越地方の中心都市・長岡、かつての城下町の大地と風景、人びとの日常生活は、意味づけられてきたのである。

長生橋あたりの信濃川の土手から北方を眺めると下流域に弥彦山が見える。634メートルの山だが、山頂から日本海の水平線に佐渡の島影が見える日がある。越後平野は日本海と結ばれている。

越後一の宮、弥彦神社が山麓にあり、緑ゆたかな神域が体験される。

歌人・与謝野晶子が長岡を訪れた時、堀口大學は、晶子の短歌についてそのイメージのすばらしさに感嘆している。晶子は、その姿と形、印象について、弥彦山を紫のかはほり（こうもり）という言葉で表現したのである。これとは別の短歌だが、晶子の短歌が刻まれた記念碑が長生橋の東側のたもと近くの土手に飾られている。詩の心が生きているトポス、場所だ。

詩の心は、人間のナイーブな深い思いだ。詩心は、絵画においても息づいている。ポイエシス、制作、創造、表現は、根底的に詩心なのである。人間にとって快いもの、それが詩である、というパスカルの言葉がある。

終戦後、数年たったある日のことだったが、私自身にとって忘れがたい絵画体験がある。それは、

セザンヌとの出会いである。

長岡駅は洋風の箱形の、シンプルな、だが洗練された建築の駅舎であり、幸い焼け残った建造物だった。私の家は、この駅近くの線路端に近いところにあり、列車・汽車の発着が容易にイメージされるような駅とはほとんど地つづきのところにあった。駅構内の起重機や貨物のホームもすぐ近くにあった。駅も汽車・列車も私たちの日常生活に深く入ってきていた。いつも旅どころがかきたてられているような家だった。汽笛の音は、私たちの生活の音となっていた。

長岡駅から西方に向かって市の中心的な大通り、大手通りが信濃川の方向に向かって伸びていた。戦災後、長岡市の都市計画で道路の拡幅などがおこなわれ、大手通りも戦前戦中よりも道幅が広がった。駅から歩いていくと、この通りの右側の角に市役所があり、戦禍がイメージされる荒れた状態の建物の片隅で泰西の名画展が開かれ、この会場でセザンヌの名画を鑑賞した記憶がよみがえってくる。おそらくブリジストン美術館の所蔵作品が巡回展として企画された催しだったと思う。泰西の名画に接する機会は地方ではほとんどなかったので貴重な展覧会だった。

セザンヌ——小さな絵画作品であり、ふたつの容器がモチーフとなっている画面だった。デフォルメされた姿、形のフォルム、シンプルな色彩だが、迫力がある力づよい作品であり、セザンヌの力と感性がみなぎっている絵画だった。上京してからは時々、ブリジストン美術館を訪れて名画に触れる機会があったが、いつもセザンヌのこの作品を体験するよこびがあった。

セザンヌは絵画を目の論理、光学と呼んでいるが、五感や感覚のナイーブな活動が画面に浮かび漂っている。

セザンヌには絵画について抱いていた願望があった。セザンヌは、バルザックやゾラの小説作品に浮かび漂っている、そこはかかない詩情、香気とでも呼びたくなる雰囲気、五感や観察力によって絵画の全体的調和として表現されることを望んでいたのである。色彩は表面にはない、それ

は奥ゆきにある。大地の根源にまでさかのぼっていくこと、自然との深い対話、オリーブの声に耳を傾けること、プロヴァンスのプッサンであること、セザンヌはこうしたことを望みながら、オーギュスト・コントの言葉に励まされて、自分の道・方法を忠実に守りつづけて独自の画境を切りひらき、風景を、静物を、人物を制作しつづけたのだった。セザンヌが母親を描いた人物画が、ルーヴルの壁画を飾っている。セザンヌのタッチやコンポジション、色彩、画面の表情、詩情、独自の雰囲気、空気感などが、いずれの作品においても体験される。

絵画体験は独自の臨場体験である。その作品の大小やスタイル・方法・主題・モチーフ、画材がどのようなものであろうと、鑑賞者は絵のなかに入り、ふたつとない楽園・庭を、トポスや道をゆっくりと散策するのである。耳を澄まししながら、五感を全開にしてゆっくりと画面を散策する。タッチ・筆触や空気感を注意深く体験することが必要だ。鑑賞者は、例えばセザンヌの声を聞き、息づかいまでも体験する。セザンヌは最後のタッチが大切だ、という。「眼の論理」といったセザンヌだが、眼ばかりが絵画の手段、方法ではなかった。五感のことごとくが、いうまでもなく、身体が、手が、指先が、全身が、絵画世界の支柱となっているのである。

人間にとって、なによりも頼りになる身体、だが人間にとって不安の種ともなっている身体、こうした身体が、まことに晴れがましい姿を見せるのは、ポイエシス・制作や創造、そして行動や行為、プラクシスのさまざまな場面においてである。17世紀、オランダの画家フェルメールは、絵を制作中の画家の姿を描いている。

フェルメール、庶民の日常生活のさまざまなシーンがモチーフとなった絵画作品は、一見したところカラー写真かと思われる印象を鑑賞者に与えるが、写真ではない。フェルメールだ。

写真は、ロラン・バルトの表現を用いるならば、かつて、それは、そこにあった、といういわば証拠写真であり、完了過去なのである。思い出のつぼと呼びたくなる大切な写真もあるが、絵画と

写真はまったく異なる。写真をしのぐほど写真的な絵画もあるが、それでも絵画だ。写真が絵画に与えた影響にも注目したいが、写真がフランス人ダゲールによって発明されたのは1839年。オーギュスト・コントが、それまでは社会物理学と呼ばれていた科学を〈社会学〉la sociologie と呼ぶことにした同年のことだ。記憶しておきたい出来事だ。写真、映画、映画史、絵画史……いずれも社会学の研究や考察、アプローチのジャンルに入ってくるもので、絵画社会学や映画社会学、建築社会学、集落景観の社会学、風景や音風景の社会学を容易にイメージすることができる。

さまざまな絵画や彫刻などを紹介しながら“社会学のギャラリー”を用意することは、意義深いことではないだろうか。

フェルメールは、手紙を読んでいる女性や手紙を書いている女性などを描いているが、手紙の社会学がクローズアップされるシーンだ。フェルメールは日常的な居住空間や生活空間、家のなかの片隅に姿を見せしている人物のごくありふれた姿をモチーフとして制作しているが、オランダの17世紀の庶民生活が鮮やかに表現されている。

1991年の秋、10月なかばに私たちは家族3人で成田空港からアムステルダムに向かった。ソ連邦の上空を旅して、モスクワ空港でトランジット、夜間にアムステルダムのスキポール空港に到着して列車でアムステルダム駅へ、そしてタクシーで予約していた運河に面したホテルに投宿した。翌朝、ホテルの部屋の窓を開けると、眼前に広がっていたのはオランダの17世紀の画家が描いているようなオランダの空と光だった。忘れがたい風景である。

アムステルダムでは運河めぐりを楽しみ、美術館やレンブラントの家へ。この水の都には、はね橋があり、風車もあった。水の都ヴェネツィアの運河はまるで迷路のような運河だが、アムステルダムのそれは、幾何学的な規則正しい形状の運河である。

幾何学的な形・姿が画面に表現されている絵画というと、例えばカンディンスキーの絵画が浮か

んでくる。彼は、モスクワで体験した太陽や色彩に激しく心をゆさぶられたのである。たまたま体験したモネの絵画に接して、光と色彩のみごとなドラマに強い印象を抱いている。日常的世界の絵のような世界の展開に、カンディンスキーは身心をゆさぶられたのである。

絵画は凝縮された生活世界、拡大された生活世界、発見された環境世界、イメージされた人間的な世界、イマージュとなった世界、こうした世界は、互いに結ばれて絵画世界となっているのである。

絵具や画材の色をはるかに超えた色彩のシンフォニー、みごとなタッチ・筆触、さまざまな形・姿、耳に触れるさまざまな音、体験される匂い、光のドラマ、独特の雰囲気、不思議な空気感、それが絵画、個性の叫び声——絵画の宇宙だ。

長岡市の中心部に近いところに平潟神社があった。子どもの時、夏祭りの夜店を両親とともに訪れた懐かしい記憶がある。アセチレンガスの匂いが漂っていた。走馬燈を目にした。夜店の屋台に水中花が並んでいた。水中花を買ってもらって、家に帰って水中花遊びを楽しんだことが懐かしい。

マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』には日本の水中花が姿を見せるシーンがある。水中花が花開くように、過去のさまざまな出来事やシーンがつぎつぎに思い出されて浮かび上がってくるのだった。

1時間は、ただの1時間ではない。それは形や色や光や音、匂いなどが一杯につまっている万象の1時間なのだ。ブルーストのシーンだ。

写真は、明らかに完了過去だが、絵画においては時間の持続性が体験されるように思われる。生が生きつづけている。セザンヌは、過ぎ去ってしまったわけではない。セザンヌは、生きつづけている。

絵画史やさまざまなジャンルの美術作品、多様な集落景観などに注目することによって、人類や人間の生活や生存の姿をイメージしたり、理解したりすることができるだろう。

ラスコーやアルタミラの洞窟の壁画がきわめて

名高い絵画だが、描かれたモチーフ、動物の姿や技法・描法などは、絵画の創始と人間の営み、試み、表現的行為の輝かしい記録だ。

一日、一日を生きつづけるために描きつづける。記録する。表現する。描くことは、生存の方法ではないだろうか。

虚無に等しいものを祝祭に転換し、さらに驚異に転換するもの、想像を絶するものの出現を期待する人間の願望を芸術の起源として理解した人物がいる。ラスコーの壁画は、人間にとって芸術とは何か、ということを示している好事例なのだ。テヘランに生まれたが、後にパリに住み、映画の研究と哲学の領域を中心として考察をおこなったヨセフ・イシャグブールの見解である。

ラスコーの洞窟、人間が洞窟に居住して生活したという痕跡は明らかになっていない。

さまざまな芸術作品は、人類と人間の貴重な存在証明であり、歴史の大切な年表なのである。さまざまなジャンルの歴史は、人びとの日々の生活のなかで営々として築きつづけられてきた。過去は、いつも生きつづけている。未来は過去が放っている光である。浮かび上がってくるのは人びとの日常生活だ。

洞窟の壁画を描いた人びとは、どのような思いを抱きながら一日、一日を生きていたのか。こうした絵画こそ絵画史、芸術史のハイライトなのだ。時は過ぎていく。時の記録づくりは、たえまなしにおこなわれている。死者による生者の支配というオーギュスト・コントの言葉は、つねに深い意味を持っている。

ルネサンスは実在したのだ。モニュメントとなっている芸術作品によって時代、時代の人びとは、支えられてきたのである。モネも、セザンヌも私たち自身とともに生きつづけている。

2018年10月17日水曜日、上越新幹線で新潟県の中越地方の中心都市・長岡市へ向かう。国境の長い長いトンネルを抜けると越後湯沢。川端康成の『雪国』ゆかりの湯の里だ。——ふたたび長い

トンネルを抜けると六日町駅。駅に着く前、車窓の右手方向に八海山が姿を現す。待ちかまえていて、車窓からこの名山をスケッチ。柳田国男は、車窓からの風景に魅力を感じて、車窓を風景の窓と呼んでいる。信州・小海線の汽車の旅での一シーンだ。

トンネルに入ると車窓は鏡となり、黒々とした鏡に人物の顔などが映る。堅い鏡だ。やさしい、ソフトな鏡は、〈水鏡〉だ。ナルシスが水辺に姿を見せる。

〈水かがみ〉——堀口大學のエッセーや詩などのコレクションだ。この文人・詩人は、鏡の人だ。川は動きゆく鏡なのである。水辺は、東京生まれの長岡人・大學にとって身を寄せたくなる特別な場所、トポスだった。

長岡は堀口大學にとって父祖の地、父親・堀口九萬一も、大學も、旧制の長岡中学校で学んでいる。父親は外交官、大學は若き日、上京して慶應義塾に入学、永井荷風などに師事したが、在学の期間は短い。外交官の父親のすすめで海外へ。外国暮らしを体験するチャンスに恵まれた珍しい人物だ。国際人、異邦人となった大學は、マージナル・マンではない。日本への帰属意識が高い、誇り高い日本人だ。女流画家マリー・ローランサンは、大學と親交があったが、ローランサンはこの詩人を「御飯を食べる日本の鶯」と呼んでいる。

最晩年のことだが、堀口大學は、身近な人びとに列車で長岡へ帰りたい、という言葉もらしている。故郷・長岡への汽車の旅を夢見ていたのである。

長岡、冬場は雪深いところ、春が待ち遠しい大地だ。真冬、墨絵のような景色が目映る。雪国で体験されるさまざまな音がある。いずこにおいても環境や風景は、さまざまな音によって意味づけられている〈音の宇宙〉なのだ。音—それは人間の生存と生活、人生のことごとくと深いかかわりがある不可欠の現象だ。声—聲に始まり、身体そのものも、日々の暮らしも、人と人との交わりも、居住空間も、人間の行動や行為も、さまざまな音とともにあるといってもよいだろう。生活と

は、なかば〈音〉なのだ。人びとそれぞれの生活史において、音の原風景やサウンドスケープ=音風景をイメージすることができるだろう。人びとの生活は、音のなかにあるといってもよい。音を手がかりとして、日常生活へのアプローチを試みることができる。

上越新幹線に乗車している時、体験されるさまざまな音がある。昭和28年、上京して東京で学んでいた頃、上越線の普通列車の旅・長岡—上野、7時間半ほどの乗車時間だった。今日、上越新幹線の旅・東京—長岡間、およそ1時間半と少々の乗車時間。スピードの時代となった。失われてしまったものはないのだろうか。

長岡駅で目に触れたポスターがある。〈信越線開業130周年〉、そして長岡駅に掲示されていた〈お知らせ〉——〈長岡駅開駅120周年〉——鉄道の歴史年表だ。上越線の開業は昭和6年、1931年のことであり、私たちの世代はその3年後に生まれている。

イギリスで鉄道の時代がスタートしたのは、1830年代のことだ。ハーバート・スペンサーは1830年代の後半、技師として鉄道に就職している。中部イングランドのウスターで職務についていたおりに、たまたま目にした化石に注目して、進化論について関心を抱いたのだった。社会進化論、スタートのシーンだ。

名高い絵画、ターナーの「雨・蒸気・速力」が制作されたのは、1844年のことだ。ロンドン留学時、ターナーとコンスタブルの絵画は、私にとって特別な絵画だった。昭和42年から43年にかけての留学である。初秋、9月初めに日本を出発して、ソ連邦経由でヨーロッパに向かった。

横浜港から出航、ソ連邦の汽船ハバロフスク号でナホトカ港へ、シベリア鉄道でハバロフスクへ。アムール川の流れを目前にすることができた。ハバロフスクからは初飛行、空路、イルクーツクへ。シベリアの開発の拠点都市のたたずまいと都市景観を体験することができた。空路でモスクワに向かう。忘れがたい思い出は、イルクーツクでバイカル湖をバスのツアーで訪れたことだ。湖畔で湖水に手を入れた記憶がある。

モスクワでは赤の広場や寺院、劇場、百貨店などを訪れたが、墓地へと向かい、チェーホフの墓を訪ねて祈りを捧げた日がある。名高いミュージアム、トレチャコフやプーシキンを訪れて、プーシキン美術館で絵画の数々の名作を鑑賞することができ、幸いだった。

モスクワから国際列車ショパン号でポーランド経由でオーストリアのウィーンに向かった。ワルシャワでは少々時間があり、駅前の広場へ。ワルシャワの都市の景観をかいま見ることができた。今日ではベラルーシとなったが、国境の駅プレストにストップした時には駅舎を車窓からスケッチした。

チェコスロバキアを経由して列車はウィーンに到着、旅のグループは解散。一人旅となり、オーストリアをはじめ各国を旅してフランスへ、パリに一週間ほど滞在して、カレーから連絡船でドーバー海峡を渡ってイギリスに入国した。

カンタベリーに向かい宿泊、ロンドンへ向かった。イギリスの大切な地を訪れてからロンドンに向かい、留學生活が順調にスタートした。

カンタベリーからロンドンのヴィクトリア駅に向かう時、車窓の右手方向に美しい虹を眺めることができた。ターナーやコンスタブルには虹が姿を見せている絵画がある。絵画とは、虹そのものだ。

ゲーテは、光学についてのエッセーの図版集に自筆のスケッチを掲げている——太陽、ゲーテの右眼、虹、プリズム、ルーペなどが描かれているが、絵画がイメージされる図版だ。イオニア学派の影響を受けながら、ゲーテは目と太陽の人となっている。目が太陽のような状態でなかったら、目で対象を見ることはできない、というゲーテの見解がある。

人生にはつまずきの石があるが、そうした石を取り除いてくれる方法、それが詩である、とゲーテはいう。

堀口大樹——身体、どこが明るいのか。いろいろと迷った末に詩人は〈ひとみ〉に注目している。〈ひとみ〉こそ、なによりも明るいところなのだ。

デルポイの神殿の銘〈汝自身を知れ〉という名

言に注目したプラトンは、人と人とが向き合った時、相手の人見・瞳が鏡となって、その鏡に自分の姿が映って見える、という。『アルキビアデス 1』のシーンだ。

ロンドン留學時の研究テーマは、「文化の民族差または国民差に関する社会学的研究」というタイトルだった。横浜港から船出した時からすべてが私にとっては大切な学びの舞台だった。ロンドンではロンドン大学のLSEと大英博物館ブリティッシュ・ライブラリー、ナショナル・ギャラリーなどが私の学びの中心的な舞台であり、大学、LSEではポッパー教授やファース教授などとの交流を通じて学習と研究を進めることができた。幸運な日々だった。

イギリスで佐原六郎先生をお迎えして短期間、イギリス各地の教区教会や大聖堂、ストーン・ヘンジなどを旅した日々は、私にとってまことにうれしい、忘れがたい旅体験だ。恩師との異国での旅の日々は私の大切な財産であり、そうした日々はいまなお生きつづけている。ストーン・ヘンジ——巨石の文化において、人間と大地、人びとの暮らし、自然と文化・文明が浮かび上がってきた。人類、人種、国民、国家……庶民の日常生活、文化と文明、歴史、歴史的風土、歴史的社会的世界、環境と環境世界、生活世界、芸術、芸術活動、多元的現実、人生を生きるということ、自然と大地、旅すること——こうしたモチーフと一体となりながら、異国での学習と研究がおこなわれたのである。そしてハーバート・スペンサーの学説と方法・思想の研究。

なぜイギリスへ。それは、イギリス・英国が英語文化圏の社会学の祖国であり、シェイクスピアの国だからだった。また、芸術の諸領域において著名な作品などを体験する機会に恵まれていたからである。

大英博物館で、ロゼッタ・ストーン、アテネのパルテノン神殿のフリーズ、浮き彫り、古代エジプトの芸術……ブリティッシュ・ライブラリーのなつかしい円形のリーディング・ルームを忘れることはないだろう。BBC放送の依頼を受けて、日本語でロンドンについての印象を放送した、特別

な日を思い出す。

佐原六郎先生は塔の研究者でもあり、世界各国の造塔思想の比較研究をおこなって、文化と芸術、宗教などの分野で研究成果を発表してこられた研究者である。

長岡でのこと。NHKのテレビ番組、10月17日夜の時間帯だったが、〈世界が注目！アートの力が病院を変える〉と題された番組があった。日本・四国こどもと大人の医療センターの試み、アートの実践活動が紹介された。

アートは、生きる力となる。こうした事例がいくつも紹介された。ホスピタル・ギャラリーの例も放映された。これは金沢でのケース、ロンドンのチェルシーの病院での事例報告。アート・セラピストの活動やアート・ディレクターの活動も注目される。アートは、健康の維持のために意義深い。生活の質を高めるためにも、病院経営のためにも、アートがおおいに注目される。ホスピタル・アート・ディレクターの活動などがあらためて注目される。

人生の日々を生きる力、希望を抱くことは、誰の場合でも、どうしても必要とされることだ。アウグスティヌスは、時は人の心に不思議な業^{わざ}をなす、といったが、記憶と希望の両方向がさし示されたのだった。芸術作品や芸術にかかわる諸活動などによって生きる力と歩むべき道がさし示されることがあるといってもよいだろう。

絵画は平面への挑戦、彫刻は立体とヴォリュームへの挑戦だが、絵画はふたつとない時空間、いわば世界の創造であり、絵画の道はかなたへと伸びひろがっている。行き止まりの袋小路ではない。静物は壁に貼りついているわけではない。時空間に存在しているのだ。

ライナー・マリア・リルケは、パリで生活していたおりにセザンヌの絵画にめぐりあい、セザンヌから表現や実現、存在などについて学び知ることができた。青の系譜についてヒントを得ることができた。イタリア・ポンペイの壁画に見られる

濃密な青色、シャルダンの青色、さらにセザンヌの青色、青色のモノグラフィーがイメージされる、とリルケはいう。セザンヌが描く果物は事物的なものになり、かたくなに現在し、抹殺し得ないものとなっている。実現、レアリゼーションを求めて、セザンヌは闘いつづけたのである。リルケの見解だ。果物、林檎は、そこに現在している。それは世界となっているのだ。

真理はテキストにはない。真理は、地形にある、というサン＝テグジュペリの言葉がある。大地と大空の人・飛行士サン＝テグジュペリが、日々の任務と体験をふまえてつむぎ出した言葉だ。サルトルが行動の文学と呼んだサン＝テグジュペリの小説に漂う独特の詩情、人情、人間の深い心がある。

堀口大學が訳出した『夜間飛行』、『南方郵便機』、人間と人生、大地と宇宙的自然、家族、家、住まうこと、風景などについて注目したいページと場面がある。彼は人間を住まう者と呼んでいる。科学における概念は方向であり、方向によって風景の意味が生まれる、とサン＝テグジュペリはいう。

目的地をめざして、ただひたすらに行動する、飛行する、行動と行為の思想と哲学が姿を現す。大空と大地の人には、経験的な社会学という言葉が見られる。人びとの協力した実践的活動において、社会学がイメージされている。

サン＝テグジュペリには薔薇の花を捧げたいと思う。堀口大學は、自分の詩を赤い薔薇と呼んでいる。

ヘルマン・ヘッセは水彩画を描く楽しみを持っていた詩人だが、ヘッセの絵は詩情ゆたかな画面であり、ゆとりが感じられる、のびやかな表情を浮かべている。言葉を綴ることと絵を描くことは、日常生活において大切なリズムとなっていたのである。

ヘッセにとって、頼りがいがある樹木は、いつもそこに帰ることが許される故郷のような対象と

なっていた。風景は人間にとって信頼できる友となっていたのである。ヘッセは、家の人であり、樹木の人だ。

出発、出勤、労働・仕事、帰宅、マイ・ホームへ。一日の役割を終えて、無事、帰宅することは、ホメロスのオデュッセウスのイタケ島への帰還に見られるような、まことにめでたい、喜ぶべき慶事なのだ、とエリアーデが述べているが、そのとおりだと思う。そこに姿を見せていたオリーブの木を残しておいて、寝室を造る時、ベッドの支柱としてそのオリーブを活用したエピソードを人びとに紹介することによって、オデュッセウスは自分が何者であるかということを証明することができたのである。まことに危険な旅を終えてイタケ島に帰還したオデュッセウス、この船旅は名高い旅だが、イギリスのギッシングは、家族の幸福という視点からこの名高い旅に注目している。

人生と呼ばれる壮大な旅は、日々の、また、そのおりの旅によって意味づけられており、さまざまな旅は記憶と思い出の道標となっている。——遠足、修学旅行、上京・帰省、留学、父祖の地への旅、墓参、晴れがましい旅、家族旅行、思いがけない旅、古寺巡礼の旅、外国旅行……。私たち家族3人にとっての、まことに楽しい忘れがたい外国旅行は、1991年10月なかばから翌年2月初めにかけてのヨーロッパ各国の旅、そして11月中旬から年末にかけての1カ月余のパリでの異邦人としての日常生活である。

私たちは全国各地でさまざまなミュージアム・美術館を訪れ、オペラやコンサートなどを体験し、都市景観に注目して、大聖堂・寺院・教会へ。さまざまなトボスやホドス、公園や駅や画家ゆかりの大地や自然、人びとの日常生活、街頭の風景などを体験することができた。旅は社会学の実践であり、大切なフィールド・ワークだった。旅によってもたらされる贈り物、学習の成果は、計りがたく大きい。

セザンヌへの旅。1992年1月早々のことだったが、私たちは家族3人で南フランスのエクス＝アン＝プロヴァンスへ。ローマからピサへ、そしてコート＝ダ＝ジュールへ、地中海を目のあたりにしてセザンヌの生まれ故郷を訪れたのだった。

ミラボー大通り、泉水の場所があったが、こうした市の中心部から離れたモーヴにセザンヌの家があった。門口でブザーを押すと婦人が姿を見せたので、日本からの旅びとであり、アトリエを拝見させていただきたい旨を告げると、心やさしく、どうぞお入りください、という言葉が耳に触れ、私たちは幸運を喜び合い、セザンヌのアトリエに入ることができた。壁一面がすべて大きなガラス窓、光のるつぼと呼びたくなるトボス、アトリエだった。セザンヌの静物画に描かれているような容器や花瓶などが机上に飾られており、私たちはまるで絵のなかに入ってしまったような気持ちになった。セザンヌ、その人がいまにも私たちの前に姿を現すのではないかと思われるほどの臨場感だった。このアトリエ訪問は、私たちそれぞれの、また、家族の生活史を飾っている、忘れがたい思い出である。

パリからイタリアへ向かい、私たちはミラノでレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を鑑賞、フィレンツェへ。ルネサンスを実際に体験することができた。そして各地をまわりローマへ。ヴァチカン市国では、サン＝ピエトロ大寺院で元旦のローマ法王ヨハネ・パウロ2世の年頭のミサに幸運にも参列することができた。この大聖堂の入ったところに、ミケランジェロの名高い彫刻作品「ピエタ」が飾られている。

ミラノにはミケランジェロの「ロンダニーニのピエタ」を鑑賞することができるところがあり、私たちはこの作品を鑑賞している。有賀喜左衛門先生は、ミラノのこの作品に特別な感銘を受けておられる。このうえなく深い情感と愛情が体験される絶品に、社会学者は烈しく心をゆさぶられたのである。

私たちは車窓から地中海を眺めることができたが、カンヌに宿泊、丘の上にあったシャガールの美術館を訪れて、色彩と光の、詩情ゆたかな愛情

あふれる絵画を鑑賞したのだった。

詩人で作家・思想家ポール・ヴァレリーの生まれ故郷は、地中海の港町セート（セト）。この港町での生活と光景、港湾の風景、船舶・舟は、ヴァレリーの生活史において大切なよりどころとなっていた。

パリでの朝、ヴァレリーは海の夢を見ていたところだったが、さまざまな音、物音、響きによって襲われ、目覚めたのだった。ヴァレリーは、さまざまな音が入り乱れた音の遠近法によって描かれた音の絵画という言葉を残している。

ジャン・コクトーに「カンヌ」と題された詩がある。「私の耳は貝の殻」という名高い詩があるが（堀口大學の訳詩）、この詩は地中海が姿を見させている海の詩だ。「海の響きをなつかしむ」耳は貝殻に酷似している。

堀口大學は海とも川とも縁が深い詩人だが、やはり川、河川、小川の人だ。

人間をシンボルを操る動物と呼んだカッシーラーは、芸術を現実の強化として理解している。

芸術作品も、芸術にかかわる諸活動、制作、創作、詩作、創造、表現も、ことごとく身体の開端であり、あふれるばかりの生命力の発現だ。こうした作品や諸活動は、人間のアイデンティティそのものの、凝縮された生活史の姿、そして時代の様相なのである。芸術作品や芸術活動は、どのような形態の表現であろうと、活動のスタイルや手順がどのようなものであっても、環境や生活世界、人びとの日常生活との融合なのである。

1839年——社会学命名／ダゲールによる写真術（ダゲレオタイプ）の発明——1872年、モネ「印象・日の出」制作——1874年、印象派の第1回展覧会が開かれる。ダゲールゆかりのトボスで。20世紀に入って、ポール・ヴァレリーはジヴェルニーに晩年のモネを訪ねている。

モネの絵画作品を体験したヴァレリーは、その印象と想いを広大無辺の純粋詩、ヴィジョン、視像の詩の極致という言葉に託している。

古代ギリシアのプルタルコスは、ある詩人に触発され、影響を受けて、詩を言葉で描かれた絵画、詩にたいして、絵画を言葉を用いない詩と呼んで

いる。詩と絵画は、しっかりと結ばれているのだ。

デンマークの画家ハンマスホイの絵画を沈黙の詩と呼ぶこともできる。チェコ出身のムハ（ミュシャ）の大作、連作「スラヴ叙事詩」を国立新美術館で鑑賞したことがある。みごとな絵画、驚くべき大作、迫力に満ちたドラマそのものだった。

ロマン・ロランは、ミレーの作品を田園生活の詩、休日のない福音書と呼んでいる。私たちは、パリから日帰りミレーゆかりのバルビゾンを訪れて、ミレーの家やフォンテーヌブローの森などをめぐり歩いたことがある。テオドール・ルソーの館へも足を運んだことを思い出す。森の入り口には、ミレーとルソーの記念碑が設置されていた。自然のままの石に刻まれたモニュメントだった。

『月光とピエロ』や堀口大學のフランスの詩の訳詩集などに注目すると、こうした詩業が堀口大學の心の色と形、リズムであり、心情のマップそして音譜で描かれた時刻表であることが判明する。

時刻表は、客観的時間、制度としての時間、標準時、広がっている時間だが、大學の場合、時刻表の時間はソフトな人間的時間、記憶、思い出、回想、追憶であり、加わる時間なのである。人間は、深く広々とした時空間、世界に身心を委ねて人生の日々を旅している。

サン＝テグジュペリは、広がっているのは、歴史家の時間、加わる時間が人間の時間という見方を示し、こうしたいずれの時間も人間にとっては意義深いという。

生そのものというべき時間、時空間、世界に注目していきたいと思う。人間には計りがたいところや無限の多様性、そして身体を中心軸とした多様な活動や生き方が見られるのである。

理性・知性とならんで感性に注目することによって多面的な人間の姿を多角的にイメージしたり、理解したりすることに努めたいと思う。

パリ・セーヌ左岸には、中世美術の殿堂クリュニー美術館がある。私たちは何度もこのミュージアムを訪れているが、名高い五感のタピスリーに特に注目して、イマジネーションと感性の広がりゆく宇

宙的世界に身心を委ねて、かけがえがない貴重な時空間を体験したのだった。このミュゼの入り口に近い外壁には太陽が姿を現しており、Nil Sin Nobis というラテン語が綴られた日時計がデザインされて建物の外壁に姿を現している。この私が姿を見せていなければ、世のなかは真暗、どうにもならないという意味の言葉だ。

日時計は絵画の原風景、太陽は絵画の友、支え、アポリネールはデッサンも絵画も光の声だ！という。光の声に想像力と五感を働かせて、全身でその舞台に立ちたいと思う。芸術作品や芸術活動を体験することによって、生命力を、生きていく力を高めていきたいと思う。あくまでも、一人の人間であることに、そして歴史的社会的世界や生活世界で身心を支えながら生活していることに、あらためて注目しながら、意義深い一日、一日を人びとのなかで生きていきたいと思う。

パリ・ミラボー橋からエッフェル塔をスケッチした日がある。1991年12月10日のスケッチだ。

セーヌ川はパリの母なる川、母胎であり、シテ島とサン＝ルイ島こそパリの発祥地、座標原点だ。ミラボー橋は、こうした島から見ると下流に姿を見せている。セーヌ左岸にエッフェル塔を眺めて、さらに下っていくと、やがてアポリネールゆかりのミラボー橋だ。

鉄道橋の技師・エッフェルは、大空に向かってみごとな橋一塔を建造したのである。1887年にこの鉄の塔は竣工している。パリ万国博覧会のみごとなシンボル・タワーだ。

2018年、今年は日仏通商友好条約が1858年（安政5年）に定められてから160年の記念年であり、パリの各所で日本の文化がさまざまな催しにおいて多様な形態で紹介されている特別な年だ。フランスでは、ジャポニスムの潮流があった。

ジヴェルニーのモネの家には日本の浮世絵が何点も飾られており、みごとな花畑や水鏡、睡蓮の池のモネとともに、モネに見られるジャポニスムにも注目したい。

パリ滞在中、また、パリを訪れたおりに私たちは三度、このジヴェルニーを訪れたが、4月初めにこの地を旅した時には、睡蓮は花開いていな

かった。5月末に訪れた時には、睡蓮の花が開き始めていた。バシュラールは、水上に姿を現しているこの花を夏の夜明けの不意打ちの花と呼んでいる。回遊式の水の庭は、日本の文化となっている造園の方法になった、日本への郷愁が感じられる庭なのである。近くを流れているエプト川から水を引いて池を造り、池の水をふたびこの川に戻すという方式の池だ。川の池である。モネと日本、日本の文化とのかかわりに注目したい。ある年、私たちはジヴェルニーへ、そしてルーアンへと向かった。モネが描いた連作「ルーアン大聖堂」は、日時計そのものということができる、みごとな絵画群である。

私たちはパリのセーヌ右岸のサン＝ラザール駅からジヴェルニーへ向かう列車に乗車したが、モネは、またマネも、この駅や蒸気機関車を描いている。

ミラボー橋のたもとで、堀口大學はセーヌ川の水音に耳を傾けている。水のほとりは、この詩人にとって心安まる、身心のよりどころである。

堀口大學には「詩人よ、耳で語らうよ！」という言葉がある。生命力がある言葉のリズムと語順、声一聲、音譜に、虹の詩人は生活史と身心を委ねたのである。

〈出典〉

ガスケ、与謝野文子訳『セザンヌ』岩波文庫、2009年。

堀口大學訳『アポリネール詩集』新潮文庫、1954年。

山岸 健『レオナルド・ダ・ヴィンチへの誘い——美と美徳・感性・絵画科学・想像力』三和書籍、2007年。

山岸 健『絵画を見るということ 私の美術手帖から』NHK ブックス 786、日本放送出版協会、1997年。

〈文献〉

山岸美穂『音 音楽 音風景と日常生活』慶應義塾大学出版会、2006年。

山岸 健・山岸美穂『感性と人間 感覚／意味／方向 生活／行動／行為』三和書籍, 2006 年。

山岸 健『風の花と時計——人間学的に』人文書館, 2014 年。

山岸 健・山岸美穂『耳を澄まして 音風景の社会学／人間学』人文書館, 2016 年。

堀口大學『水かがみ』昭和出版, 1977 年。

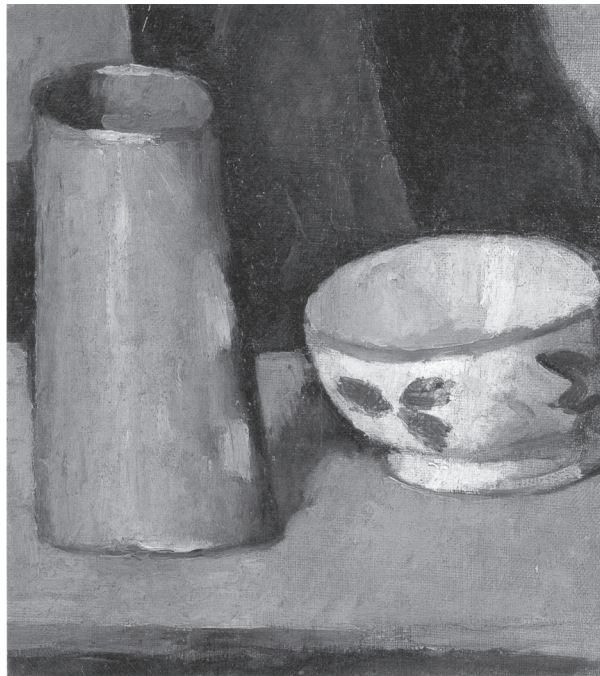
堀口大學『月光とピエロ』日本図書センター, 2006 年。

M. メルロ＝ポンティ, 滝浦静雄, 木田 元訳『見

えるものと見えないもの』付・研究ノート, みすず書房, 1989 年。

大出春江『産婆と産院の日本近代』青弓社, 2018 年。

~~~~~  
〈月下〉堀口大學研究誌, 第 24 号 (平成 30 年 9 月発行), 長岡★堀口大學を語る会所収:  
山岸 健「堀口大學の感性と想像力——風景と音, 音の風景 川と橋と塔——」。



ポール・セザンヌ

1839 - 1906

＜鉢と牛乳入れ＞

c.1873-77, 油彩, カンヴァス 20.0×18.1cm

東京：ブリジストン美術館